



TITLE:

唐蕃會盟碑の研究

AUTHOR(S):

佐藤, 長

CITATION:

佐藤, 長. 唐蕃會盟碑の研究. 東洋史研究 1949, 10(4): 237-281

ISSUE DATE:

1949-01-15

URL:

<https://doi.org/10.14989/145861>

RIGHT:

東洋史研究

通卷第十卷第四號

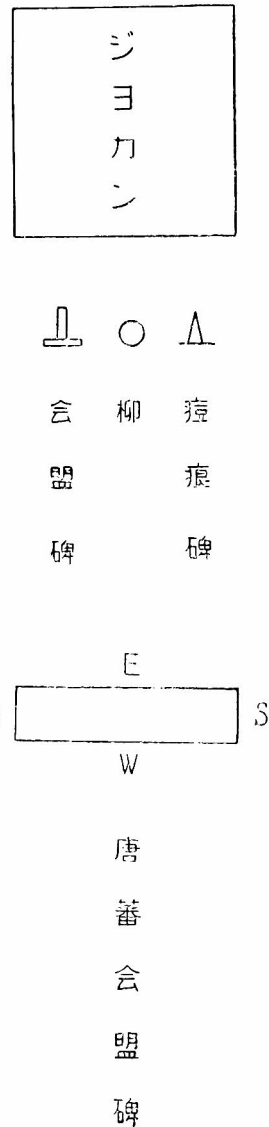
昭和廿四年一月發行

唐蕃會盟碑の研究

佐藤 長

西藏古代史を研究するには唐代の諸記録と西藏側の諸文献とをその材料とするのが先づ常識的な考へであらう。所が此等兩者の記載の間には種々の疎隔があつて一舉に事實の決定を行ふのは困難な状態にある。西域西陲に敦煌文書が出てよりかなり唐側の史料の確實性が裏附けられたが、年代・王名等の點に於ては尙隔靴搔癢の感があつて不充分なるを免れなかつた。従つて兩者の間を聯結するには何等か新に媒體となるべき史料が必要となる譯で、之によつてはじめて兩方の史料がテストされ、基礎的事實の決定を行ひ得る事になるのである。茲に唐蕃會盟碑の史料的价值が云々される事になり、技術的には之を出發點としてのみ西藏古代史はその具體的な全貌を形成し得るであらう。

さて西藏の首府ラサ Iha sa の街の中央にジエカン jo Khan と云ふ寺院があるが之は中國側の史料に大召寺又は大詔寺と云ふ名で現れて來るものである。その寺院の入口の前に大きな柳の木があり、その南側に痘痕碑、北



側に唐蕃會盟碑がある。ジヨカンの入口は西側に面して居り、従つて碑も西側が正面となる。その西面Wに漢蕃兩文が記されて居り、東面(裏面) Eは全面が蕃文を以て記されてある。北面Nは西藏側の官吏の名が連ねてあり、南面Sには唐側の官吏の名が刻まれて居る。高さは約十一呎三吋、巾三十一吋半、正面の西藏文字の高さは一時、その行は十六吋の長さであり、北側は高さ十一呎二吋、巾は十四吋半である。④

以上は碑を史料として最初に實見紹介したワツデル Waddell の記載に従つたものであり、その存在場所と内容は一應正確に決定せられた如くであるが此の貴重な記録は如何なる理由か其後一向顧られる所がなかった。

内藤博士は此の碑について大正七年に東京の史學會で講演され、その筆記が同時に紹介せられた拓本贗葉と共に「研幾小録」に收められて居て、之が現在最もよくまとまつた文献とされて居る(後述)。之によつて碑の發見紹介に關しての大要は知り得るが博士はワツデルを全く利用されて居られず、従つてその存在個所等についてもワツデルに於て既に解決せられた問題が再び、疑問として取上げられたりして居る。博士が此處で拓本によつて判讀せられたのはW面の漢文の部分のみで、西藏文の方は後に寺本婉雅師によつてその判讀翻譯が發表せられた

(後述)。漢文の方は兎も角として西藏文の方はかなり誤讀が多く相當重要な史的事實が見逃されて居るのでここに之を再び整理して西藏古代史の事實構成の正確な材料となさうとするのである。

ラサの街と云ふのは人口三萬程度の小都會であるが此處には未だ人に知られざる碑文が若干あるらしい。ベル Bell によれば會盟碑の如き碑文はラサに八個所あり、サムエ Tsam yas に一個所あると云ふ^⑤。今之を「西藏碑文」と比較して見ると西藏碑文の方は十一個を記載して居るが、その中四個はラサ市外のものであるから残り七個がラサ市内のものとなる。兩記錄はかくして數に於て略一致するが如くであるが西藏碑文の方にはベル等が紹介した全文西藏語の紀元七六三年の西藏の支那征服記念碑等^⑧は含まれて居ないし、或は痘痕碑の如き全く磨滅させられては居るが漢藏兩文で書かれたものもあるので漢蕃合せて少くとも從來九個碑石があつた事は確實であらう。^⑩

さて問題の會盟碑は漢文の部は西藏碑文にも載つて居り、ベルの書にも西藏文からの翻譯がある。ベルは穆宗時代の會盟碑として居るが西藏碑文の方は之を德宗時代の會盟碑として居る。中國側の記錄は實はこの碑の發見の最初から之を德宗碑と誤つて居り、此の事は後に碑文の研究の上にも若干の混亂を起した(後述參照)。

そもそも唐の穆宗の長慶年間に唐蕃の會盟が長安とラサで行はれた事は唐代の諸記錄に明かな所で疑ふ余地がないが、それが碑に刻されたと云ふのは何れの記錄にも見當らないのであつて、碑の存在を中國人が知り始めたのはかなり時代が下つて康熙の頃かららしい。尤も西藏人の間では既に知られて居たらしく、プトンの佛教史にも記載はある。しかし西藏人自身も此の碑文を正確に判讀して居たのではなく、只之に西藏の古王朝時代の輝か

しい勝利が刻されて居るとのみ知つて居たのである。^⑪

支那側で最も古く此の碑文を記したものは大清一統志と西藏記(龍威秘書所收)であらうが、その文章は内藤博士も云はれた如く、全く讀めない所を無視して文章を完全に捏造したもので文章としてはよく出来て居るが史料としては信頼するに値しない。之に比すれば先に述べた西藏碑文は前二者に比較すると稍々正確に碑文を寫して居る。近年に出来た衛藏通志は前三者のものを含採した感じであるが文章の異なる點は主として一統志・西藏記によつて反て原文より遠くなつて居る。尙乾隆五十七年に出来た衛藏圖識は古さより云へは大清一統志に亞ぐものであるがこれには大召寺の説明の條に寺の前に德宗代の條約碑があるとのみ云つて居る。大清一統志に於ては此の碑は正しく穆宗代の條約碑となつて居るが如何なるわけか圖識の方は誤つて居る。これより碑文も通志も共に之を德宗碑として居り、ワツデルが研究を發表した時も衛藏圖識に迷はされて遂に之を德宗碑と斷定して居る。^⑫

以上は碑文又は碑の存在についての記録であるが、その存在が一應明かになつて漸次拓本の流布が擴まつてからは諸書にその轉寫と跋を見るやうになつた。今主なるものを次に記してゆかう。

* 吐蕃會盟碑 孫星衍「寰宇訪碑錄」 卷四 (平津館叢書第十集所收)

題名のみ。長慶元年の碑とする。

* 盟吐蕃題柱文 「全唐文」 卷九百八十八 所收

かなり正確に讀んである。

* 題不明 吳榮光輯「筠清館金石記」

未見であるが陸氏の金石補正^{卷七十一}によると「有跋無文」であり、跋語には「據全唐文所錄、以小字旁注

之」とあると云ふ。尙陸氏の記述によるとやはり長慶元年五月のものとして居るらしい（金石補正卷七、十一第五丁）。

* 吐蕃會盟碑 洪頤煊著「平津讀碑記」卷八（傳經堂叢書所收）

跋文のみ。長慶元年のものとする。

* 盟吐蕃碑 陸增祥撰「八瓊室金石補正」卷七 十一

此の書の碑文はかなり眞面目に讀んであり誤も少いが、内藤博士の補正した點は全く讀めて居ない。跋文は前四者のいづれよりも長く既刊の著書をかなり引用し、相當訂正して居る。陸氏は道光元年に駐藏官吏たりし友人より一本を誂られたと云つて居るが卷七十一、第四丁、内藤博士によれば拓本が作られたのは乾隆と同治の二度であると云ふから、⁽¹⁶⁾陸氏のは乾隆時代の拓本でもあらうか。訪碑録・金石記が此の碑を長慶元年五月のものとするのを「盟在二年五月」と斷言して居る。

* 唐蕃會盟碑 羅振玉編「西陲石刻錄」羅氏は四面の拓本一揃を持つたらしく、跋語に「碑陰皆蕃文」とまで述べて居る。此の書に載せられたのは碑陽W面の漢文のみである。

以上の拓本の研究によりこの會盟は長慶二年にエサで行はれたものである事がほぼ決定的となつたが、一方歐羅巴人の研究が西藏文の方を中心として起り、英國のラサ遠征隊（一九〇二—四）が之に大きな影響を與へる事になつた。

歐羅巴人で最初にこの碑文を取上げたのはバツシェルである。彼は一八六九年到北京でW面の漢藏文のものと西藏側の宰相名を記したN面の拓本を手に入れ、之を研究して唐書吐蕃傳の翻譯の附録として發表した。

* Bushell, The Early History of Tibet, from Chinese Sources, Appendix I. (with Facsimiles & Resto-

rection) JRAS, 1880.

彼はこの拓本を入手した時紙の状態からして十八世紀のものと云はれたと云ふから、乾隆時代の拓本でもあらうか。今彼の寫眞版にして出したものを見るにかなり明瞭で読み易い。彼は云ふ^⑬。

「不幸にして、此等（大清一統志等支那の文獻）の各行は其の意味をはつきり與へては居るが、原物の正確なコッビイではなす。そして其等は既にヨーロッパに於て出版されたジェスイツト神父 Amyot と ロシアの Archimandrite Hyacinthe の二つの翻譯の材料となつたものである^⑭。此の碑の支那文は西藏原文の翻譯である。私は主に前者から翻譯したが、それは支那文によりなれて居るからであり、又有能な支那人の學者の援助があつたからである」^⑮

彼はかくして漢文の部分を判讀翻譯し、注釋を加へたのであるが、讀めない所は赤字にして之を補ひ、更に西藏文の方も參照して正確なコッビイを作つて居る。條約の締結された時期についても長慶二年五月六日として居り、兎も角バツシエルの研究は洋の東西を問はず當時としては優れた研究と云ふべきである。

バツシエルの研究發表の翌年一八八一年にダスは印度より西藏に入り、歸國後その旅行記を出したが、此の中には會盟碑のみでなく種々の石碑の手がかりが與へられて居る（註^⑯參照）。

* Chandra Das, Journey to Lhasa and Central Tibet, 2nd ed. 1902.

ダスはベンガル生れの印度人で、印度測量局の任務を以て入藏したのであつて目的は單なる文化研究ではなかつた爲に會盟碑研究そのものには何等重要な材料は提供して居ない。

ダスの後、一八九一年にワックヒルは衛藏圖識の英譯及び註釋を出したが、之はバツシエルの唐書吐蕃傳英譯・

會盟碑紹介と並んで西藏研究上大きな貢獻をなした。只之れには前述の如く碑を德宗代のものとして書いて居る爲に歐羅巴人に一つの疑問を提起した。

その後一九〇三年に英國は從來の英藏交渉の停頓を一舉に解決する目的を以てラサ遠征隊を派遣したが、オースチン・ワツデルは當時一軍醫として此の役に従ひ、一九〇四年ラサに至るや直ちに碑文の調査に取りかかった。彼は會てバツシエルの論文を読み、ラサ往來の西藏人からの傳聞により、或はロツクヒルの衛藏圖識の翻譯を見て、ラサに此の碑のある事を知り、ジョカンの前に遂に問題の石碑を實見したのである。

* Waddell, *Ancient Historical Edicts at Lhasa*. JRAS. 1909. p. 923- 1910. p. 1247- 1911. p. 390-
ワツデルは云ふ。

「一九〇四年遠征隊と共にラサに行つたがその時重要な碑文を二つ見出した。一つは德宗と *K'in ston lde btsan* との間に結ばれた七八三年の條約碑と、他の一つは同時代の戰勝について記した碑である。そして二つ共西藏に於て發見された最古の本物の歴史資料であり、我々が知つて居る西藏語で書かれ又作られた文として最古の材料である。」⁽²¹⁾

二つの碑の中後者については註に述べたから、此處では觸れない(註⁽²¹⁾参照)。前者の彼の云ふ德宗とチスロンデツアンの間に結ばれた條約碑が問題の碑であるが、ワツデルは當時の状況からして西藏人に對する刺戟的な行動を取る事を慎み、拓本を取らず寫眞をとり、鈔寫を行ふに止めた。寫眞は乾板を壞してしまつた爲に學界に紹介されずに終つたが、鈔寫の方は双眼鏡と忠實な西藏人書記の授けによつて、數回調査して、「注意深い西藏文の寫し」careful eye-copiesを作つた。彼は之を一再ならず校訂し、「あり得るやうな誤は最少限度に減じたと思

ふ」と云つて居る。更に彼は親切なバツシエル夫人から拓本を貸與され、支那側の文献とも比較して研究した。彼の研究の特徴は從來知られなかつたE面西藏文の部を紹介研究し、バツシエルが紹介して尙判讀し得なかつたW面及びN面の西藏文をも合せて研究した所にあるのであらう。しかしテキストが右のやうな方法を以て作られたeye-copyであるならば、これは利用に際しては余程用心しなければならぬ。事實後に示された内藤博士の拓本と比較すると、實にワツデルのテキストは誤が多く、到底史料としての利用價值を認める事が出来ないからである。例へば既に支那史料研究の結果バツシエルに於て之を穆宗碑と決定して居るにもかかはらず、ワツデルは德宗碑であるとして問題を逆轉させて居る。その證據固めとして彼はシュミツドのボディムル^{②①}とかロツクヒルの衛藏圖識とかの記載を援用して居るが、それはこれらの史料のテキスト批判が行はれた上での話ではない。従つて穆宗時代のものであるとの記載がないと云ふ單純な消極的な證明に止つて居るのである。

既にテキストが正確でない上に德宗時代の碑と見た爲にあらゆる點に於て史料の誤解が起り、彼の研究は結果に於ては失敗に歸して居る。又如何なる理由によるものかS面の唐側の官吏の姓名も彼は氣が付かなかつたらしく全く報告する所がない。かくして内藤博士が四面の拓本一揃を紹介するまではラウフアー・ペリオ等部分的な研究を除いては此の碑文の研究は内容上何等進歩しなかつたのである。

* Laufer, Bird Deviation among the Tibetans, T'oung Pao, 1914.

* Pelliot, Quelques transcriptions chinoises de noms tibétains, T. P. 1915.

ラウフアーの使用したテキストはバツシエルの寫眞版と羅振玉のそれである。羅振玉は一九〇九年に上海出版の「神州國光集」第七號に此を出して居る。^{②②}この書は自分は匆卒の間に瞥見した事があるのみで記憶が明かでない。

いが、確かW面漢文とN面との拓本を寫眞版として出したものであり、跋文が付いて居たと思ふ。之と羅氏が後に出した西陲石刻錄の鈔寫とは如何なる關係にあるのかは明かでない。

ラウファアの業績は吐蕃時代の西藏人の鳥卜法と同時代の西藏語の音韻を研究したものであるが、羅氏の拓本の中西藏人官吏の姓名を利用して居る。本稿のN面の部分がそれに當る。ペリオの研究は之に對する詳細な批判である。

我が國では入藏の先輩河口・寺本兩師は共に之に注意せられず稍々遅れて入藏した青木文教先生によつてはじめてその存在が確認せられた。青木先生の談によると此の碑の周圍は塙を以て圍まれ、近寄る事は困難で、向ひの民家の二階よりして纔に寫眞を取り得たと云ふ。⁽²⁴⁾

ついで既に屢々述べた内藤博士の紹介研究が現れたが、之は凡そそれまでの研究狀態の概要を盡したものであつて、博士自身の手に入れられた寶左藏の拓本を研究の基礎として用ひられたものである。これが贈られた時は乾隆時代の拓本としてであつたと云ふが、博士は同治の手拓ではないかと疑はれて居る。⁽²⁵⁾

* 内藤虎次郎「拉薩の唐蕃會盟碑」(研幾小錄所收)

博士の研究は漢文の部分のみであつたが、西藏文の方は寺本師の手に委ねられ、十一年後に發表された。

* 寺本婉雅「唐蕃會盟碑文」(大谷學報第十卷第三號)

寺本師の研究は四面共であり、ワツデルに比してテキストが良好なる爲に若干の進歩を示して居るが不充分的點が多く、史料としての價值を満足に利用せしめ得ない個所が少くない。

其後はW面西藏文についてはベルの翻譯が出で、史的事實については陳寅恪・姚薇元諸氏の研究もあるが之亦

斷片的なものに止まつて居る。

* Charles Bell, Tibet, past and present.

* 陳寅恪 吐蕃藏泰贊普名號年代考(蒙古源流研究之一)(國立中央研究院歷史語言研究所集刊第二本)

* 姚薇元「唐蕃會盟碑跋」(燕京學報第十五期)民國二十三年・北京

言語研究の資料としては内藤博士も既に注意せられたが、羅常培が後N・S面を中心として優れた研究を出して居り、法制史の上からは唐代の國際盟約文書の一例としてW面漢文を仁井田博士が引用せられて居る。

* 羅常培「唐蕃會盟碑中之漢藏對音」(唐五代西北方音)(國立中央研究院歷史語言研究所單刊甲種之十二)

* 仁井田陞「唐宋法律文書の研究」第三篇第三章、八二〇—九頁

以上の如く、碑文の全面的な再検討は未だ今後に問題として殘されて居るのであり、本論考もそれに對して些かなりとも貢獻する事を企圖したものに他ならない。

顧れば本碑文の研究に手を染めたのは昭和十五年秋で當時は内藤博士紹介の寶氏拓本寫真版により、それに一部分羅常培氏紹介の「藝風堂繆氏拓本」寫真版等を參照しつつコツビイを作成した。翌十六年三月にはプリントを作り有志に配布したが翻譯には青木先生から種々示教を辱くした。

* 唐蕃會盟碑の史料的价值

テキストの文章は頗る現代文と異つた感じのもので意味の取り難い所も多いが敦煌文書と比較すると當時の西藏文と云ふものは皆此のやうな形態のものであつたらしい。従つて和譯も頗る拙い文章であつたが、石濱先生が「西藏史」の中に之をそのまま發表せられたのは汗顔の至であつた。

* 石濱純太郎「西藏史」(支那歴史地理大系第十一卷支那周邊史下) 三三六頁以下

其後青木先生は別にW面西藏文の譯を出されたが、優れた譯文なのでそれを以て自分の譯を補訂させて戴いた。本稿の和譯はかくして作られたものである。

* 青木文教「西藏問題」外務省調査局、昭和十八年一月

今それに簡単な解説を加へ脚註を施して發表するが、之によつて漢藏兩方面の史料が如何にテストされるかの問題についてはいづれ稿を改めて説きたいと思ふ。牛歩遅々たる自らの研究の歩みには忸怩たるものがあるが敢て茲に俎上に載せて諸賢の嚴正な批判を請ふ次第である。

尙トランスクリプションは便宜上寺本式に従ふが chapter letter 及び hyphen は用ひない。

i 母音符 gi gu は原碑に於ては現在使用の反對型のものも使用されて居るが之は i を以て表すことにした。

註

① jo khai は正しくは jo bo khai で聖主殿を意味する。之を大召寺と云ふのはジョカンの西北方市外にラモチ ra mo che なる寺院があり之を小召と云ふに對照したものである。大召は蒙古人の此の寺院に對する呼稱 yeke jo の意音譯である。

② ワッデルは北面は「漢蕃の兩字で西藏官吏の名が記されて居る」云々して居るが(Waddell, Ancient Historical Edicts at Lhasa, Journal of the Royal Asiatic Society, London, 1909, p. 926) バッシェルは唐書吐蕃傳の英譯の中、「預盟之官十七人皆列名焉」の註

に「十七人の官吏の名前は同じ碑の北側の面に刻まれた」と云ひ唐側の官吏名の如く云つて居る(Bushell, The Early History of Tibet from Chinese Sources, JRAS, 1880, p. 534, fr. 71.)。兩者の記載は矛盾して居るが今は實見したワッデルのそれに從つておく。

③ Waddell, Historical Edicts, JRAS, 1911, p. 383.

④ Ibid. p. 423.

⑤ チャールス・ベル著・田中一呂譯「西藏・過去と現在」附録一頁。

⑥ 「西藏碑文」は「西藏奏疏」と合して一本となつて居る。

全體の名は明かでない又著者も知られて居ない。含まれて居る泰疏の口付け道光廿五年が最も遅いものである。ロックヒルには西藏碑文は一八五一年(咸豐元年)に刊行されたものとして居るが、その理由は述べられて居なく(Rockhill, *Tibet, a Geographical, Ethnographical, and Historical Sketch, derived from Chinese Sources*, JRAS, 1891, i, 4, p. 254)。

⑦ 西藏碑文に含まれたラサ市外の石碑と云ふのは次の四基である。

a. 御製普陀宗乘之廟瞻禮紀事碑

割註に「布達拉山下東北隅色拉寺山内外廊下東壁上」とあり、セラるの寺院内にあるものなる事が分る。

b. 磨盤山新建關帝廟碑

文内に

是先駐軍前藏、徵兵饕餮、謁札什城關帝廟

とある。札什城は「西藏圖識」圖考下卷に「拉措佛境圖」として掲げられた鳥瞰圖の中小詔の北側にある札什城であらう。その西側に演武場があるが、明かに支那軍のそれで、札什城はその兵營に當る。ワッデルは遠征記の地圖に Dabci なる名を與へて之を記載し(Lhasa and its Mysteries, London, 1906, p. 327, Environs of Lhasa)* チャンドラ・ダス又旅行記の地圖に同じく Dabci と記して居るものが

(Chandra Das, *Journey to Lhasa and Central Tibet*, 2nd ed. 1902, p. 149, Plan of Lhasa) 之に外ならない。札什・Dabci 共に西藏語 bkra-cis (吉祥)の音譯であらうか。

c. 教場演武廳碑文

この演武廳は「西藏圖識」圖考下卷「拉措佛境圖」にある小詔北、札什城西の演武場であり、ワッデル・ダスでは Chinese Parade と記された場所であらう(Waddell, *Ibid.*, Das, *Ibid.*).

b. 前藏進東雙忠祠碑記

割註に、

雙忠碑在前藏大昭東北

とある。この大昭は四川よりの入藏路上西康より西藏に入る所にある太昭(中華社「中華民國新地圖」等)と同じであらう。

⑧

此の碑の内容を最初に紹介したのはワッデルである(Historical Edicts, JRAS, 1910, p. 1247)。彼がラサ遠征隊に加はり、調査した三大古碑の一つが之で、彼は之をボタラ勅碑 Potara Pillar Edicts と名付け、東面 A、南面 B、北面 C として判讀翻譯並びに註釋を記して居る(Ibid. p. 1234 以下)。ワッデルは此の碑の出来た年代を正確に決定しては居ないが、碑文の内容が吐蕃の長安侵入を述べたものであり、穆宗長慶碑——所謂唐蕃會盟碑、ワッデルは誤つて之を德宗代の

- 會盟碑として居る——に殆ど見られぬ古體の綴字が現れるので、代宗廣德元年（七六三）より穆宗長慶元年までのものである事は間違ないとする。ベルによると之は方柱で、高さ約二十三米、三層の石壇上に建ち、その二層には鐵柵を巡らし、頂蓋は金字塔狀である（川中一呂譯「西藏・過去及現在」附錄八頁）。ベルの挿圖にもこの碑柱は出て居るし（Charles Bell, *Tibet, past and present*）その他ボタラ宮殿の寛真には必ずその正面山下に屹立して見えるものである。此の碑文の内容は確にワツデルの云ふ如く（*Ibid.* p. 1248）支那の文献を除いて他の東方一般のそれと同じく西藏在來の歴史書には全く述べられて居ない事であり、西藏を建設し彼等の祖國の爲に名聲を克ち得た英雄的戰士の名も全く今は忘れられて居る。そのやうな點からして此の碑文はかなり重要な史料となるものであるがワツデルの原文のコッピイは必ずしも充分に據り所とする事は出来ない。と云ふのは彼の穆宗會盟碑に關する史料採集の方法と研究結果から見て、此のコッピイが權威あるものとは思へないからである（本文後述參照）。ベルの翻譯（*Tibet, past and present*, Appendix p. 1. 邦譯附錄一頁）はその點かなり正確ではなうかと思ふがテキストが示されて居ないのが惜しい。
- ⑨ この痘痕碑についてはワツデル（*Thusa and its Mysteries*, p. 362. fn. 1.）青木文教先生（「秘密之國西藏

遊記」一九五頁）に詳しい紹介があるが、寺本婉雅師河口慧海師も之について述べて居られる（「唐蕃會盟碑文」大谷學報第十卷第三號所收、一〇三—一六頁）。但、碑の内容については寺本師は、

「能く凝視せしに向つて右方は漢文であり左方は藏文であつて僅に右方の漢字數字をノートに記入し得たのであつた。今當時のノートを檢するに左の如き漢字が書き残されて居る。」

『唐古忒、五印度之一族』云々

と云ふ。尙寺本師の問合せに對する河口師の通信にも、「察するに向つて右は漢文にして、左は藏文なりしかと思はる」

と云ひ、漢蕃兩文がある如く云はれて居る。ワツデルはこの碑について、

「其の碑の西藏語の題字は支那語の如く垂直に書かれ、垂直に書く普通の書き方には従つて居ない。」（*Waddell, Ibid.*）

と云ひ、いづれも記述が斷片的で如何なる内容のものか全く明かでないが西藏文或は漢文も含んだ石碑である事は誤ないであらう。

⑩ ダスによると、

「ラサのユト橋 *yu-toe zang-pa* のたもとに漢蕃兩文の碑があり、一千年以上經て多少磨滅しては居るが容易に讀みとれる。」

とある (Das, *Ibid.*, p. 148)。ロックヒルは之に註して自ら譯した衛藏圖識の大召寺6項 (Ro-chu-li, Tibet, JRAS, 1891, p. 264) を参照すべき事を云つてゐる。しかしユト橋の碑と大召寺前の碑とは全く場所が異つて居るし、「西藏碑文」の中にもそれらしい碑文は見當らない。ダスの記載も理解し難い點があるが暫く疑問を残しておく。

⑪ フトンの佛教史 (Buston, *Chos-byun* 東北大學藏 fol. 130 b) には次の如くある。

[*gral pa can*] rgya la dng drags 'e bcom nas
dion shan bdun byas tahi yi ge lha shi rdo rin
ja bris/

レーパチェン(唐側の所謂可黎可足贊普)は支那と戦ひ甥舅の誼を結入る文字をラサの石碑に書き記した。

オーハミラーの此の個所にあたる翻譯は次の如くである。

He made war with China, was victorious, and the numerous reports of his generals were written down on the Long Stone in Lhasa. (Overmiller, *History of Buddhism by Buston*, II part, p. 197)

一見して東北テキストと異つて居る事が知られるがオーハミラーの使用したテキストでは此の個所は fol. 145a であり、全く枚数が一致しない。東北テキスト

の紹介には適當な人が他にもあらうから茲には述べないがオーハミラー使用のものに比してかなり新しいものである事は確實である。

又ダスが一八八二年にラサに至つた時の旅行記には「ジョカンの位に西藏人によつて九世紀における支那人に對する勝利を記念する爲に立てられた古い石碑があり、それにはその時支那皇帝と *Palpacan* 王との間に締結された條約の原文がある。」

とある (Das, *Ibid.*, p. 151)。ダスは恐らく西藏人から直接聞いたまゝを記したのであらうが、此の記録のみからすれば西藏人は支那人から聞いたかも知れぬとの疑がある。しかし右のフトンの記事によつても見られる如く、西藏人はやはり古代からの傳承によつて、此の碑の存在理由を知つて居たのである。

⑫ 内藤虎次郎「拉薩の唐蕃會盟碑」(研幾小録所收)三

〇六頁。

⑬ 西藏碑文二十六丁。

⑭ 衛藏通志卷六寺廟。

⑮ ワッデルの利用したのはロックヒルの翻譯 Tibet, JRAS, 1891 である。

⑯ 内藤虎次郎前掲書三〇二頁。

⑰ Bushell, *Early History of Tibet*, JRAS, 1880 p. 536.

⑱ ワッデルによると (Waddell, *Historical Fictits*,

JRAS. 1911. p. 389).

Anyot, Memoires des chinois, par les missionaires de Peking, vol. XIV. pp. 209-13. Paris. 1789.

イアキントの著書名は明かでない。

⁽¹⁷⁾ Bushell, Ibid. p. 536.

⁽²⁰⁾ Waddell, Historical Edicts, JRAS, 1909. p. 924.

⁽²¹⁾ Schmidt, I. J., Bodhinir, Geschichte der Ost-Mongolen verfasst von Ssanang Nseten. St. Petersburg. 1829. p. 405.

⁽²²⁾ Waddell, Historical Edicts, JRAS, 1911. p. 419.

⁽²³⁾ Laufer, Bird Devination among the Tibetans, T'oung Pao, 1914. p. 68.

⁽²⁴⁾ 註⑤参照。寺本師の間合せに對する河口師の答は痘痕碑と混同されて居る事が歴然として居る(大谷學報第十卷第三號一五〇頁)。

⁽²⁵⁾ 青木文教「秘密之國西藏遊記」一九一頁・一九五頁この青木先生の會盟碑の寫眞は實見を以てすれば從來紹介せられた唯一のものである。

⁽²⁶⁾ 内藤虎次郎「拉薩の唐蕃會盟碑」(研幾小錄)三〇三頁

〔補遺 一則〕

本稿N表註⁽³⁶⁾(三九頁)に *bran ka* が地名又は部族名であらうと云ふ事を述べておいたが、之について右の推定を裏書する材料がプトンの「佛教史」に若干あるの

で餘白を利用して附加しておきたい。

チベット王の時に百葉經 *las rgya pa* (skt. *karmacataka*) と金光明經 *gser hōd dan pa* (skt. *svaryaprabhasottama*) の二部が翻譯されたがこの譯經者は *bran ka nu la ko ca* と *gnags dñha na ku mha ra* の二人であつた(東北テキスト 123a)° 前者の *nu la ko ca* の梵語形は明かに *mūlakoca* であるがオーバーは *bran ka* を *blan ka* とし居る (Obermiller, History of Buddhism, by Pu-ston. II part. p. 186)° オーバーミラーの用ひたテキストがこのやうな綴字であつたのかも知れないが少しくをかしうと思ふ。

所が續くチンドンツェンの時代に試験的に西藏人を七人出家せしめたがその中に *bran ka mu ti ka* なるものが居る(東北テキスト 127a)° オーバーミラーは之を *Kunmudig of Tai* と譯して居るが (Ibid. p. 190) 之を以て見ると彼は *bran ka* を地名乃至部族名として理解しなかつたらしい。幾多の例によつても西藏人の名にはその出身地名又は出身族名が冠せられて居るのでこの場合に *bran ka* をそれと見るより外ないのである。尤も人名を *naulika* としても之が梵語の如何なる形を寫したものは直には決定し難い。強いて云へば *naulika* なる語もあるが人名としては如何かと思はれる。或は *naulika* の譯でもあらうか。又は *bran ka ku mu ti* とあつたのが混亂してこのやうな形になつたのであらうか。一切は新なるテキストとの對校を待つより外にあるまい。

〔S表〕

1. //rgya chen poñi blon po che phra [n] mjal dum gyi gcigs ḥdsin

支那 大 の 大 臣 大 小 ^① 和 會 の 同盟 締結
大 唐 宰 相 等 和 好 登 壇

phal gtogs pañi thabs dañ myiñ rus [la]//

^② になべて關與せる者の官屬 と ^③ 名 姓 について
立 盟 官 寮 名 位

2. [//rgya] chen poñi chab srid kyī blon po chen [po] bkañ la-gtogs

支那 大 の 國 家 の 相 大 勅命に従へる
大 唐 宰 相 同 平 章

pañi [thabs dañ myiñ rus//]

^④ 者の 官屬 と(その)名 姓
事 名 位

3. [//] jēñ [ḥgi] dañe pu shiñu mun ha gi lañ gi [thabs] yod pa

正 議 大 夫 守 門 下 侍 郎 の 官 に ある 者
正 議 大 夫 門 下 侍 郎

bkañ chen po la gtogs pa.....//

命 大 に 従ふ者 ^⑦
同 平 章 事⑧ □ □ □

4. //.....ñ pu shiñu chū [gu gi lañ gi thabs] yod pa bkañ chen

夫 守 中 書 侍 郎 の 官 に ある者 命 大
朝 散 大 夫 中 書 侍 郎 同 平

po [la gtogs pa.....//]

に 従ふ者

章 事 崔 植⑩

5. // thañi cuñ dañe phu shiñu chū [gu gi lañ gi thabs] [yod] pa

太 中 大 夫 守 中 書 侍 郎 の 官 に ある 者
太 中 大 夫 中 書 侍 郎

bkañ chen po la gtogs pa wañ pha //

命 大 に 従ふ者 王 播
 同 平 章 事 王 播^⑪

6. // cuñ daḥi phu shiḥu shañ ḡu ho bo ḡi lañ ḡi thabs yod pa

中 大 夫 守 尙書戸部侍郎の官にある者
 中 大 夫 尙書戸部侍郎

bkaḥ chen po la ḡtogs pa to [ḡgwan] ywañ //

命 大 に 従ふ者 杜 元 穎
 同 平 章 事 杜 元 穎^⑫

7. // jeñ ḡḡi daḥi phu peñ bo shañ ḡu thabs yod pa bkaḥ chen po

正 議 大 夫 兵部尙書の官にある者 命 大
 正 議 大 夫 兵部尙書

la ḡtogs pa seḥu ḥbḥen //

に 従ふ者 蕭 俛
 蕭 俛^⑬

8. [//] rgya chen poḥi blon po phal kyī thabs dañ myiñ [rus] //

交那 大 の 大 臣 一般 の 官 屬 と(その)名 姓
 大 唐 諸 寮 案 登壇者 名 位

9. // kḡm cḡi kwan log daḥe phu shañ ḡu dsa bog y[e]ḥ(i) thabs

金 紫 光 祿 大 夫 尙書左僕射の官に
 金 紫 光 祿 大 夫 尙書左僕射

yod pa han kaḥu //

ある者 韓 皐
 韓 皐

10. // [theḥu] ḡḡi lañ ḡgu ḡi cuñ ḡiñ ḡi thabs yod [pa] ḡḡ(i)ḥu

朝 議 郎 御 史 中 丞 の 官 にある者 牛
 朝 議 郎 御 史 中 丞 牛

siñ shu //

俗 孺
 俗 孺

11. [//thaḥi cuṁ daḥi phu ghem goḥu shaṇ cu tsa bog ɣ(e) l(i)]

太 中⁽¹⁷⁾ 大 夫 檢 校 尙 書 右 僕 射 兼 吏
太 中 大 夫 尙 書 右 僕 射 兼 吏

bo shaṇ cu thabs yod pa li kḥa //

部 尙 書 の 官 に ある 者 李 絳

部 尙 書 李 絳

12. [//] ḡin tshen kwaṇ log daḥi phu ho bo shaṇ cu (thab)s yod

銀⁽²⁰⁾ 青 光 祿 大 夫 戶 部 尙 書 の 官 に ある
銀 青 光 祿 大 夫 戶 部 尙 書

pa yaṇ u liṇ //

者 楊 於 陵

楊[於陵]⁽²¹⁾

13. [//] thoṇ ḡhi daḥe phu ḡḥiḥu lḥeḥi bo shaṇ cu (thabs) yod pa

通 議 大 夫 守 禮 部 尙 書 の 官 に ある 者
通 議 大 夫 禮 部 尙 書

wuḥi shiḥu //

韋⁽²²⁾ 綬

韋 綬

14. // ḡin tshen kwaṇ log daḥi pu kem keḥu tsa bog ya kyam

銀⁽²³⁾ 青 光 祿⁽²⁴⁾ 大 夫 檢 校⁽²⁵⁾ 右 僕 射 兼
銀⁽²⁶⁾ 青 光 祿 大 夫 尙 書 右 僕 射⁽²⁷⁾ 兼

thaḥi ḡaṇ keṇ ḡi thabs yod [pa]...tsoṇ shu //

太 常 卿 の 官 に ある 者 宗 瑞

太 常 卿 趙 宗 瑞

15. [/thaḥi cuṁ] daḥi phu lḥeḥi bo shaṇ cu kyam... (thabs) yod pa/

太 中 大 夫 禮 部 尙 書 兼 官 に ある 者⁽²⁸⁾
太 中 大 夫 禮 部 尙 書 兼 司 農 卿

/bḥeḥi bu//

裴 武

裴 武

16. // jən gi dahe p̃hu ɕĩhu keñ cẽhu yun kyam h̃gu [ɕu] dahe p̃hu

正 議 大 夫 守 京 兆 尹 兼 御 史 大 夫
正 議 大 夫 京 兆 尹 兼 御 史 大 夫

thabs yod pa lĩhu koñ cag //

の官にある者 柳 公 綽
柳 公 綽

17. // h̃gin tsheñ kwañ log dahe p̃hu kem gẽhu goñ bo [shañ] [ɕu]

銀 青 光 祿 大 夫 檢 校 工 部 尙 書
銀 青 光 祿^㉔ 大 夫 工 部 尙 書

kyam tsa kim h̃go wẽhi dãhi cañ kun gyi thabs [yod] pa kwag

兼 右 金 吾 衛 大 將 軍 の 官 に あ る 者 郭
兼 右 金 吾 衛 大 將 軍 郭

tshuñ //

縱

縱

18. //.....lĩhu h̃gwan.....//

劉 元。

□ □ 大 夫 大 理 卿 兼 御 史 大 夫 劉 元 鼎

19. ([/the])̃hu h̃gi lañ ɕĩhu shañ ɕu tsa ɿ lañ cuñ kyam h̃gu ɕu cuñ

朝 議 郎 守 尙 書 右 司 郎 中 兼 御 史 中
朝 議 郎 尙 書 右 司 郎 中^㉔ 兼 御 史 中

ɕiñ gĩ thabs yod pa lĩhu ɕĩ lãhu //

丞 の 官 に あ る 者 劉 師 老

丞 劉 師 老

20. [//].....

□ □ 郎 守 □ 尙 書 奉 御 □ □ 大 將 軍 兼 監 察

.....[///]

御 史 驍 騎 尉 李 武

21. [//] theḥu ken̄ cēḥu.....

朝 京 兆
朝 散 郎 京 兆 府 奉 先 縣 丞 兼 監 察 御 史

.....[//]

李 公 度

〔N表〕

1. // bod chen poḥi blon po che phra mjal dum gyi gcigs ḥdsin phal

西藏 ① の 大 ② 小 和 會 の 同 盟 締 結 にな べ て
大 蕃 宰 相 等 和 好 登 壇 立 盟

gtogs paḥi thabs dañ myiñ rus la //

從へる者の 官屬 と(その)名姓について

官 察 名 位

2. // bod chen poḥi chab srijd kyī blon po chen po bkaḥ la gtogs

西藏 大 の 國 家 の 相 大 勅 命 に 從 へ る
大 蕃 ③ 宰 相 同 平 章

paḥi thabs dañ myiñ rus //

者の 官屬 と 名 姓

事 名 位

3. [//b]kaḥ chen po la gtogs te phyin..... la dbaṅ shiñ chab srijd

命 大 に 從 ひ て を 支 配 し 國 家 を
□ □ 政 同 平

ḥdsin...(ban) de chen po dpal chen po yon [tan//]

總理する 和上 大 ベル チン ボ ユン デン ④

章 事 沙 〔門〕

4. [//.....d]mag go chog gi bla shañ khri sum rje [//]

⑤ 軍 統 領 最 高 の 長 官 シヤン チ スム ジエ ⑥ ⑦ ⑧
〔 〕 〔 〕 天 下 兵 馬 都 元 帥 同 平 章 事 尙 綺 心 兒

5. [//].....blon chen po blon.....[//]

^⑨
 相 大 ロン
 □ □ 同 平 章 事 論 □ □ 熱

6. [//].....n dmag.....bzañ.....[//]

電 サン
 天 下 兵 馬 副 元 帥 同 平 章 事 □ □ □ □

7. [//].....blon po chen po blon rgyal.....[//]

相 大 ロン ギエ
 └──────────┘

8. [//chab srīd kyī blon po che)n po (blon rgyal brtsan s... b)sher//[

^⑩ 國 家 の 相 大 ^⑪ ロン ^⑫ ギエ ^⑬ ツエン シエル
 宰 相 同 平 章 事 論 結 贊^⑭ 世 熱

9. // chab srīd kyī blon po chen po shañ (khrī brtsan) khod ne

^⑫
 國 家 の 相 大 シャン チ ツエン コエ ネ
 宰 相 同 平 章 事 尙 綺立 贊 窟 寧

stañ //

タン

悉當

10. // chab srīd kyī blon po che po shañ khrī bsher lha mthoñ //

^⑮
 國 家 の 相 大 シャン チ シェ ラ トン
 宰 相 同 平 章 事 尙 綺立 熱^⑯ 食 通

11. // chab srīd kyī blon po chen po blon rgyal bzañ ḥdus koñ //

^⑰
 國 家 の 相 大 ロン ギエ サン ドエ
 宰 相 同 平 章 事 論 類^⑰ 藏 弩悉 恭

12. // bod chen poḥi blon po phal gyi thabs dañ myiñ rus //

^⑱
 西藏 大 の 大 臣 一般 の 官屬 と 名 姓
 大 蕃 諸 寮 宗 登壇者 名 位

13. // nañ blon mchims shañ rgyal bsher khod ne brtsan //

^⑳ ^㉑
 内 相 チムの シャン ギエ シエル コエ ネ ツエン
 垂 論 琛 尙 類 熱^㉒ 窟 寧 贊

14. // phyi blon bkaḥ la gtogs pa cog ro blon btsan bsher lho goṇ //

外 相 勅命 に 從ふ者⁽²¹⁾ ロン ツエン シエル ⁽²¹⁾ ロゴン
 純⁽²⁵⁾ 論 伽羅 葛 波 屬 虛 論 贊 熱 土 公

15. // snam (phyi pa) mchims shaṇ brtan bsher stag tsab //

調 度 官⁽²⁶⁾ チムの シャン テン シエル タグ ツアブ⁽²⁷⁾ ⁽²⁸⁾
 悉 南 純 波 琛 尙 且 熱 悉諾 帛

16. // mṭan pon khab so ḥo chog gi bla ḥbal blon klu bzaṇ myes

統治長官⁽³⁰⁾ 宮殿守衛の 統領 最高 の 長官 パルの ロン ルサン ミエ⁽³⁴⁾
 岸 奔 榼 蔭 戸 屬 劫羅⁽³¹⁾ 末⁽³²⁾ 論 矩立藏⁽³³⁾ 名

rma //

マ

摩

17. // bkaḥi phrin blon bran ka blon stag bsher hab ken //

勅 信(取扱)⁽³⁵⁾ 大臣⁽³⁶⁾ ラン カ の ロン タグ シエル ハブ ケン⁽³⁷⁾
 給 事 中 勃蘭伽 論 悉 諾 熱 合 乾

18. // rtsis pa ched po -yas blon stag zigs rgan……//

會計 官⁽³⁸⁾ 大⁽³⁹⁾ イエの ロン タグ シゲ ゲン⁽⁴⁰⁾
 資悉 波 折 述 額 論 悉諾 昔 幹 富

19. // phyi blon ḥbro shaṇ klu bzaṇ lha po brtsan //

外 相⁽⁴¹⁾ ロの シャン ル サン ラ ポ ツエン
 純 論 沒店⁽⁴²⁾ 尙 □縷⁽⁴³⁾ 勃藏 他 譜 贊

20. // shal ce pa chen po shal ce ḥo chog gi bla//……blon rgyal

司法官⁽⁴⁴⁾ 大 司 法 統領 最高 の 長官 ロン ギエ
 刑 部 尙 書 □ 論 結

skyen legs tsan //

ギエン レグ ツエン

研 歷 贊

〔W表蕃文〕

1. //bod gi rgyal po chen po 2. ḥphrul gyi lha btsan po daṅ^①// 3. rgyaḥi rgyal po chen po rgya rje hwaṅ te/ 4. dbon shaṅ gñis^② // chab srid 5. gcig du mol nas//mjal dum^③ 6. chen po mdsad de gcigs bca[s] 7. pa//nam sar ṣaṅ myi ḥgyur ba// 8. lha myi kūn...
ṣes ṣiṅ dpaṅ byas 9. te/ /tshe tshe.....su/ /brjod 10. du yöd paḥi..... 11. gyi mdo rdo riṅs la [bris paḥo^⑤ //] 12. //ḥphrul gyi [lha btsan po khri gtsug] 13. lde brtsan gyi^⑥ 14. bḥun bḥu heḥu ti[g hwaṅ te..... dbon] 15. shaṅ gñis/ 16. ni/ /lagyi legs 17. ñes ci thugs rje chen 18. pos ni/ /bkaḥ drin gyis dgab pa 19. la phyi naṅ myed pas/ /maṅ po kun bde 20. skyid par bya ba la ni dgoṅs pa gcig/ 21. /yun riṅ por legs paḥi don chen po 22. la ni bkaḥ gros mthun te/ /g..... 23. rtsiṅ paḥi...shu ni sa.....che..... 24. dgyes paḥi cha..... brtseg par 25. mol nas/ /mjal dum chen po ni 26. mdsad de/ /bod rgya gñis/ da ltar 27. su mṅaḥ baḥi yul daṅ mtshams sruṅ 28. shiṅ/ /deḥi ṣar phyogs thams cad ni/ 29. rgya chen poḥi yul//nub phyogs thams 30. cad ni yaṅ thag par bod chen poḥi 31. yul te/ /de las phan tshun dgrar myi^⑦ 32. ḥṭhab/ /dmag myi draṅ//yul myi 33. mṛnam/ /yiḍ ma ches^⑧ pa shig yod 34. na/ /myi bzuṅ shiṅ gтам dris te/ 35. brḍsaṅs nas phyir gtaṅ ṅo/ 36. da chab srid gcig ciṅ/ mjal 37. dum chen po^⑨ ḥdi ltar mdsad pas/ / 38. dbon shaṅ dgyes paḥi bkaḥ phrind 39.

sñan pas kyañ ḥdul dgos to // 40. phan tshun gyi pho ña ḥdoñ ba
 yañ/ /lam 41. riñ por byuñ nas/ /sña lugs bshin 42. / / bod
 rgya gñis kyī bar/ / cañ kun 43. yog du rta brjes la/ /stse shuñ
 tsheg du 44. rgya dañ phrad pa man cad ni rgyas phu dud 45.
 bya/ /ceñ çu hyan ðu bod dañ phrad pa 46. yan cad ni bod kyis
 phu dud bya ste/ / 47. dbon shañ ñe shiñ gñen bañi tshul bshin
 48. du/ /sri shu dañ bkur stiñi lugs 49. yod par sbyar te/ /yul
 gñis kyī 50. bar na ður rdul ni myi snañ/ /glo bur 51. du sdañ
 ba dañ dgrañi myiñ ni myi grag ste 52. sa mtshams sruñ bañi myi
 yan cad 53. kyañ dogs ciñ ḥjigs pa myed par 54. sa sa mal mal
 na bag brkyañ ste//bde 55. bar ḥkhod ciñ/ /skyid pañi bkañ ðriñ
 56. ni rabs khriñi bar du thog/ /sñan pañi 57. sgra skad ni gñi
 zlas slebs so so cog du 52. khyab ste/ /bod bod yul na skyid/ 59.
 rgya rgya yul na skyid pañi srid chen po 60. sbyar nas gcigs bcas
 pa ḥdi…… 61. nam par myi ḥgyur bar/ /dkon mchog 62. gsum
 dañ//ḥphags pañi rnam dañ 63. gñi zle dañ gza skar la yañ dpañ
 du 64. gsol te/ /tha tshig gi rnam pas kyañ 65. bçad/ /srog chags
 bsad de mnañ 66. yañ bor nas/ /gcigs bcas so/ / 67. geigs ḥdi
 bshin dum byas sam/ 68. bshag na/ /bod rgya gñis gañ gis sñar
 ñes 69. pa la sdig ciñ/ /lan du dku skya ci byas kyañ 70. gcigs
 bçigs la ma gtogs so/ 71. ḥdi ltar bod rgya gñis kyī rje blon gyis…
 72. gyi… bçags mnañ bor te/ /gcigs 73. gyi yi ge shib mor bris
 nas/ /rgyal po chen 74. po gñis kyī ni phyag rgyas btab/ /blon

po 75. gcig ḥdsin pa la gtogs pa rnams 76. kyī ni log yig tu bris
te/ /gcigs kyī 77. yi ge.....du b...../ /

(20)

〔E表蕃文〕

1. //ḥphrul gyī lha btsan po khri gtsug lde brtsan dañ// rgya rje
bḥun bḥu heḥu 2. chig (hwañ) te gñis// chab srid gcig tu mol te
mjal dum mdsad paḥi 3. (g)ñis kyī tshul ci ḥdra ba dañ//
mjal dum mdsad paḥi 4.s rdo riñs la bris paḥo//
5. (//)ḥphrul gyī lha btsan po ḥo lde sbu rgya(l//yu)l byuñ sa
dod tshuñ cad 6.// bod kyī rgyal po chen po mdsad pa
yañ// gañ la 7.on poḥi ni dbus chu bo chen poḥi ni mgo//
yul mthos g..... 8.dam gyī lha las//myiḥi rgyal por
ggeggs te//gtsug lag 9.ñi//.....d kyī srid btsugs// chos
khrims bzañ pos ñi/ 10.ñ// byam(s paḥ)ḥi bkaḥ drin
gyis ñi nañ gi chis sbyard/ 11.....phyiḥi dgra btshul te//
chab srid ni phyir shiñ che 12.ñi slar shiñ brtsan po.....
g myi ḥgyur// byin 13.ḥi g-yuñ druñ gi rgyal po chen po
.....deḥi phyir// lho phyogs 14. gyī mon rgya gar dañ//nub
phyog(s)..... dañ//byañ phyogs kyī drug ni 15. smel la scags pa//
g-yug.....rgyal po sde m..... kun gyi..... 16. (ḥ)phrul gyī lha
btsan poḥi brtsan po dañ.....po.....
17. (phyo)gs myi gus pa myed de// phan tshun dgyes ciñ// bkaḥ
stsal..... 18. ñan pa yin/ ṣar phyogs ñi rgya ḥdug

pa// mtsho chen [po]hi..... 19. ɕar pa logs kyi rgyal po ste//lho
 bal gshan dañ myi ɰphr..... 20. chos bzañ//gtsug lag che bas//
 bod dañ yañ// ɰthab kyi zla..... 21. gyi... ste// dañ po rgya rje li
 rgyal sar shugs nas//dehe tañ gi srid... 22. rtsa gsum lon// rgyal
 rabs gcig gi ɰog du// ɰphrul gyi lha btsan [po] 23. khri sroñ
 brtsan dañ// rgya rje thehe tsoñ bɰun bu ɕiñ hwañ te gñis [/chab]
 24. srid gcig du mol nas//ceñ kwan gyi lo la//mun ɕeñ koñ co/
 25. btsan poñi khab du blañs //phyis ɰphrul gyi lha btsan po khri
 ld[c gtsug] 26. [b]rtsan dañ // rgya rje sam lañ khahe ɰgwan ɕeñ
 bɰun ɕiñ bɰu hwañ te [gñis] 27. [/chab srid]d gcig du mol te//gñen
 brtsegs nas//keñ luñ gyi lo [la] 28. [kim] ɕiñ koñ co//btsan poñi
 khab du blañs nas//dbon shañ du gyur 29. te dgyes pa las//bar
 ɰgañ phan tshun gyi soñi blon pos gnod pa 30. dag rdul byas kyañ/
 /gñen bañi chab gañ du bya ba//thugs brel che nas 31. do... dag gi
 che//dmag stoñs kyis phan thogs par byas pa dañ//phan tshun 32.
 ...gs noñs byuñ ño chog na//dgyes snañ dag kyañ ma tshad par bsrise
 te// 33. ɰdi ltar ñe ɕiñ gñen ba yin na//dbon shañ gi tshul kho na
 ltar//thugs 34. yi dam phabs pa las//btsan po yab lha ɰphrul khri
 lde sroñ brtsan gyi 35. sha sña nas//sgam dkyel chen pos ni//chos
 srid ci la yañ mkhas ɕiñ gsal 36. byams pañi bkañ drin gyis ni //
 phyi nañ myed par//phyogs brgyad du khab ste 37. m... bshñ rgyal
 po kun dañ yañ mjalde ɕiñ ɰdum bar mdsad na// rgya dañ lta
 38. shig//gñen rtseg ma //yul khyim ches yin bas//lhag par chab

srid 39. gcig du dgyes te//phan tshun dbon shañ dgoñs pa mthun
 nas//rgya rje sheñ 40. ċin bñun bñu hwañ te dañ//mjal dum du
 mol te//bkañ khon rñiñ pa ni 41. shyañs ċiñ bsald//dgyes pa¹⁹ gsal
 ni bsas ċiñ bstud nas//de.....n 42.//btsan po dbon ni¹⁹
 sku tshe gcig//rgya rje shañ ni gduñ rabs gsum gyi 43. bar du//
 bkañ khon gyi gcugs ni ma byuñ//dgyes pañi sri shu ni phan tshun²⁰
 44. phyad de//pho ñā gces pa las//bkañ phrin sñan pa dañ//dkor
 nor 45. bzañ pos ni//rgyun du ģdul na//mjal-dum gyi mdo chen
 po gcigs 46. bea ba lta bu yañ ma grub//dbon shañ mold bañi rjes²¹
 kyañ tshañ ma phyin...../ 47. thugs noñs kyis brtsal te//bar gyi
 gcugs rñiñ pa phran tshegs kyi// 48. dogs phrig ġis//legs pa chen
 poñi sku don//phyi lcigs ċe stag du gyur 49. nas//dgra chos kyi
 thabs dañ//dmag brtsan po dag kyañ myi rdul dum 50. ruñ ste//
 dgra zun gyi tshul du gyurd kyis kyañ//yoñ ñe shiñ ġñen la/ 51.
 ģphrul gyi lha btsan po khri gtsug lde brtsan gyi sha sñā nas//mkhyen
 52. ģphrul gyi tshul chags//mdsad pa ni lhañi lugs dañ mthun te//
 bkañ 53. drin chen pos//phyi nañ ġñis su sñoms ċiñ//dbu rmog
 brtsan//bkañ 54. luñ ġñan te//rgya rje bñun bñu heñu tig hwañ²²
 te dañ dbon shañ ġñis// 55. ģphrul gyi dgoñs pa ni mthun/.....
 ģi chab srid ni ġcig ste// 56. bod rgya ġñis//dbus phyir sar skyañ
 pañi mjal dum chen po mdsad nas/ 57. rgya yul du ni //keñ ċeñi
 nub phyogs ċag sañ siñi druñ du//bod chen 58. poñi loñi myiñ ni²³

skyid rtag lo bdun//rgya chen poḥi loḥi myiñ nī// 59. cañ keñ lo
 dañ po lcags mo glañ gyi loḥi dgun sla ra ba tshes bcu la// 60.
 dkyil⁽²⁶⁾ ḥkhor la ḥjags na//rgya kyis gcigs bzun ño//bod 61. yul du
 nī//pho brañ lha saḥi⁽²⁷⁾ qar phyogs sbra stod tshal du//bod chen poḥi
 62. loḥi myiñ skyid rtag lo brgyad// rgya chen poḥi loḥi myiñ cañ
 keñ lo 63. gñis//chu pho stag gi loḥi dbyar sla ḥbrin po tshes
 drug la//dkyil 64. ḥkhor la ḥjags te//bod kyis gcigs bzun ño//gcigs
 kyī 65. (m)do rdo riñs la bris pa ḥdi yañ/ /bod chen poḥi loḥi
 myiñ skyid rtag 66. lo dgu// (rgya) chen poḥi loḥi myiñ cañ
 keñ lo gsum//chu mo yos 67. bu losla ḥbrin po tshes bcu
 bshī la//rdo riñs la yī ge bris so// 68. rdo riñs la ḥdri baḥi spyān
 yañ//rgyaḥi pho ña thabs//.....⁽²⁸⁾ 69.yod pa//do
 tsaḥe dan//.....⁽²⁹⁾ vod pa/i0.....bya so
 //gcig gyi khrims rdo riñs la bris
 71.

注 意

1. S表, N表の第一行は拓本西藏字の羅馬字化, 第三行は同じく漢字の部分で原拓では西藏字の下に四行, 五行に切つて縦書きされて居るもの, 第二行は第一行の日本語直譯である。
2. 西藏語における形容詞は名詞の後に付加せられるので今之を「_____」を以て表した。
3. [] で囲まれた部分は原碑磨滅の爲読み難い所を試みに補つたものである。
4. E表, W表の文中のアラビア数字は原拓の行数を示す。

らひて6大和會をなし同盟す7(その)決して亦變らざる事を8神人すべて……しらして證^{あかし}なし9世々……
 に語ら¹⁰れて……11の要を碑に〔記すなり〕12化現せる〔神贊普チツク〕13デツエンの……14
 文武孝徳〔皇帝……15甥舅二者……16は……17如何なる善惡……18大なる憐愍^{あはれみ}によりて恩恵
 をもて覆ふ事19は外内(の區別)なく、人々すべて安^{やす}泰^たにせられる事につきて思は^{おも}ひ一なり、21永遠に善な
 る大義²²につきて商議は一致せり……23……願は……大……24喜びの……重ぬる事を25語らひて大和會は
 26なされたり。西藏支那二者は、現在に27於て支配せる域と境を守り28て、その東方一切は29大支那の域、西方30
 一切は正に大西藏の31域にして、それより相互に敵として32諍ふ事なく、戦をなさず、境域を33犯さず、心に信
 じ得ざるの事どもあら34ば、人を捉へて事を訊ぬるとも(訖れば)35放ちて後に給與すべし、36今國家一(の如く)
 なりて37大和會を斯の如くなせり。よつて38甥舅は喜びの勅信を39おこして亦安泰にあるべし。40相互の使者の
 往來も亦道は41遠くあれば以前の習慣^{しやうぐん}の如く42西藏支那二國の間、將軍43谷に於て馬を交換し、綏我柵にて44支
 那と接する下つ方⁴⁵は支那によりて供應⁴⁶せらるべく、清水縣にて西藏と接する46上つ方⁴⁷は西藏によりて供應せら
 るべし。(そは)47甥舅の近しくし親しむ習慣^{しやうぐん}の如く48に、敬仕と尊敬の禮⁴⁹なるものに合致すべし。二國の50間
 には煙塵⁵¹は現はれず、突如と51して憎惡と寇讐の名も聞くことはなからん。52國境を守る上つ方⁵³の人53も亦疑懼
 し恐怖することなくして54場所所に於ける防備⁵⁵を撤して安55樂に住し、幸福の恩恵⁵⁶はまことに萬代にまで至
 り、讚嘆の57聲は日月に到達して(それら)各々58を覆ふならん。西藏は西藏國に於て安けく、59支那は支那國に
 於て安けくなす(それらの)大なる政事⁶⁰を結びて一となし61この決して變りなからむ事⁶²三寶⁶³と聖なる人々と
 63日月と星辰とにも證せん事を64請ふ。誓^{ちか}せる人々も亦65述べ、犧牲^{いけにえ}を殺して誓約を亦66なして同盟は締結せら

れたり。67同盟は斯の如くに議定せられ68置かれたれば、西藏支那二國のいづれが先に罪69を犯し、報復として如何なる謀計^⑮をなさるとも70同盟を破棄せし事にはならざるなり。71斯の如くに西藏支那二國の君主大臣は……72……告白^{いひ}し誓^{ちか}をなせり。同盟73の文字を詳かに記して大王74二人の印璽は捺され大臣の75同盟締結に關係せる人々76の手づからの署名は書かれたり。同盟の77文字……………^⑯

〔E表和譯〕

1 化現せる神贊普チツクデツエンと支那君主文武孝^①德皇帝二者は、國家の一（の如く）ならん事を語らひて和會をなせる3……………二者の如何なる状態なりしかと云ふ事と、和會をなせる4……………碑に記せるなり。

5 化現せる神贊普オデプギエは國の起りし土地に等しく一致する程6……………西藏の大王となし又すべてに於て7……………中央大河の源頭國高く……………8……………守護の神より人の王へと生れかはりて學問9……………の

國を建設し善き法律もて10……………慈愛深き恩恵^{ぐん}を國內の淨からざるものに付與し11……………國外の敵は征服し國家は後に土地大となれり12……………は再び土地を討ち從へ……………變ぜず……………13……………のユンドウンの大王……

その爲に、南方14のモン・印度と、西方……………と北方のルツグとは15招く事に執念せり。……………王デ……………16 化現せる神贊普……………ツエンボと……………17 方挨拶せざるはなし、相互に喜びて……………18 聞きたり……………東方

は支那なり、大湖の……………^⑦19 東なる地方の王なり。南はネパール其他と……………20 善法・學問を盛になし、西藏とも亦戰の友……………21の……………第一代支那君主李の王位に即きて後、大唐の國二十^⑧23 年過ぎゆき、一の王統のもとにせん爲、化現せる神贊普23チソンツエンと支那君主太宗文武神皇帝二者は國24家を一（の如く）になす事を語

らひて、貞觀の年に文成公主を²⁵贊普の宮居に迎へたり。後化現せる神贊普チデツク²⁶ツェンと支那君主三郎聞元聖文神武皇帝二者は²⁷國家を（一の如く）になす事を語らひて、姻戚關係を重ねて、景龍の年に²⁸金城公主を贊普の宮居に迎へ、甥舅となり²⁹て歡喜せり。後中つ頃に若干の相互の守成の臣によりて迫害³⁰等愚かなる事なされたるも、親しき交りはすべてに於てなされ、結び付は大なりしより³¹………多くの兵を以て利益を得んとしたる事と相互に³²………被害の生ぜし事極まりたれば、交歡等の事亦間もなく考へられたり。³³斯の如くに近しくし親しむ（情）ありたれば甥舅の習慣にぞ従ひて³⁴心に誓^⑪を定むる事となり、贊普國父神の化現チデソソツェンの³⁵仰すらく、ガムキエチンボは致政何れにも熟達し明けく³⁶慈愛深き恩惠^⑫は、外内（の區別なく）八方を掩ひてあり。³⁷………四王すべてとも亦會合し商議をなせるに、支那の如き³⁸等は姻戚關係を重ねたるもの、國家はなるにより、甚だ國家の³⁹同盟を喜ぶと。相互に甥舅は思ひは一致せるによりて、支那君主聖⁴⁰神文武皇帝と和會せん事を語らひたり。古き憎惡は^⑬41消し去り取り除き、明き喜びを再びし²⁰採り返してその………42………贊普甥は一生の間、支那君主舅は三代の⁴³間、憎惡^⑭の執着を生ずる事なく、歡ばしき敬仕は互に⁴⁴絶やさず、使者を愛する事により、勅信をおこし又⁴⁵善き富をもて永く治むる事、和會の大重點（なりしが）結布盟の如きは亦成立せざりき。^⑮甥舅合議せる後亦すべて………47悲みもて苦しみ、中つ頃の古き親しみは些少なるものとなり⁴⁸疑懼猜疑により大善の意義は後には甚だ動搖せるものとなり⁴⁹たるにより、武器と強兵等とをもて征服せず和睦をなすを⁵⁰適當とし、寇讐は親和の風に變へて尙來り近しくし親しむ事につき⁵¹化現せる神贊普チデツクツェンの仰すらく、知識は⁵²化現者の慣例^⑯を守り、行爲は神の仕方に一致して、⁵³大なる恩惠もて、外内二方に平等になすべしとウモツェン^⑰は勅命を⁵⁴うけがへり。支那君主文武孝德皇帝と甥舅二者たる事につきて⁵⁵化現者の

思ひは一致せり。……の國家は一つなり。56 西藏支那二國は中外の地を守る事につきての大和會をなし57 支那國に於ては京師の西方シヤクサンシのほとりにて、大西藏58の年號は蘇泰七年、大支那の年號は59長慶初年辛丑の年の冬の初月十日に60壇場を設けて、支那によりて同盟は認承せられたり。西藏61國にては、ラサの宮殿の東方ラトエ國にて、大西藏の62年號は蘇泰八年、大支那の年號は長慶63二年壬寅の年の夏の中旬の六日に、壇64場を設けて、西藏によりて同盟は認承せられたり。同盟の65要領を碑に記せるは之即ち、大西藏の年號は蘇泰66九年、大支那の年號は長慶三年癸卯67の年……中の月十四日に、碑に文字を記したり。68碑を臨檢せるは即ち、支那の使者國……69……ある者杜載と……ある者70……なせり。同盟の規定を碑に書き……

71

〔S表註〕

- ① 西藏字一字あるが如くであるが判讀出来ない。他のN表と比較すれば判讀上必要なきもののやうである。
今 *phra* と同義の *phran* と假に定めておく。
- ② *phal* は *pa lu* の如くも見え、それで意味が通じなくともなくがN表と對校して *phal* と定める。
thabs は普通の義では解釋し難く、*thabs gicig* なる熟語を考へるに一つの團體 *group* をなせる状態即ち *company* の意味にとれる。従つて此の場合には同盟締結に従つた諸大臣官員の所屬せる *company* 即ち官職の意となせるものであらう。此の碑文に見える
- ③ 素朴な西藏語の表現は當時の吐蕃の文化状態をよく反映せるものである。
④ *thabs dan nyin rus* は拓本では不明である。N表の例にならつて假に文字を入れてみたが拓本に表れた文字の斷片は此のやうに讀む事を適當としないやうにも見える。
- ⑤ 夫字には *phu·phu·pu* 等種々あてて居るので經常培の如く *phu* 音のみに限定する事は出来ない（羅常培「唐蕃會盟碑中之漢藏對音」唐五代西北方音所收、國立中央研究院歷史語言研究所單刊甲種之十二、民國二十二年、一七〇頁）

⑥ *ʔiŋa* は此の後所々に散見するが漢字には全く現れて来ない。明かに「守」である。

⑦ *bkah chen po la fogs pa* は意味は「勅命執行に關與するもの」の意となるから、同平章事にあてて作つた官名であらう。

⑧ 内藤博士の判讀は「侍郎」までであるが、上段西藏文と比較して「同平章事」は當然續くべく拓本に現れた漢字斷片も亦此の四字なる事確實である。門下侍郎は元和十五年二月より七月末まで令狐楚が之になり、後に蕭儼が翌長慶元年正月までなつて居る。二年三月に裴度が守司空兼門下侍郎平章事となるまでは空位であつたのであらう。内藤博士が新舊唐書其の他に當時門下侍郎たりしもの名が見えない所から、此處は國名であり、當時の條約文の習慣に従ひその官名のみを記したものとせられたのは正しい(内藤虎次郎「拉薩の唐蕃會盟碑」研幾小録所收三二三頁)。

陸氏は此處に「段文昌」があるべき事を云つて居るが(陸增祥「盟吐蕃碑」八瓊室金石補正卷七十一所收)、段は元年二月に中書侍郎から檢校刑部尙書西川節度使へと遷つて居るし、その後彼は史上に現れぬのであるから、恐らく會盟のあつた時には門下侍郎である筈がない。内藤博士に従ひたい。

⑨ 羅氏 *phu* とするが *ʔu* である(羅氏前掲書一七〇頁)。

⑩ 崔植が守中書侍郎となつたのは元和十五年八月で長慶二年二月に罷めて居る(唐書卷六十二宰相表中、下)。此の所碑は全く漢蕃兩文とも磨滅して居るが陸氏(前掲書八丁)、内藤博士(前掲書三四一頁)に従つて彼の名を補ふ。

⑪ 王播が守中書侍郎であつたのは長慶元年十月で、二年三月には檢校尙書右僕射になつて居る(唐書卷六十二宰相表下)。

⑫ 杜元穎が戸部侍郎になつたのは長慶元年二月で翌二年二月には中書侍郎に遷つた(唐書卷六十三宰相表下)。

⑬ 正字にあたる西藏字は以下並に決定し難い。暫く羅氏に従ひ *ʔoɛ* とする(羅氏前掲書一七〇頁)。

⑭ *phu-pu* づつれとも決定し難いが、暫く *phu* とする「夫」に音最も近きが故である。

⑮ 蕭儼は註⑧に述べた如く長慶元年正月に宰相を罷めて居る。陸氏は此の碑に蕭儼が記されるのは曾て宰相であつたからで、特に宰相の次に列し同平章事と書さないで區別して居るのであると云ふ(前掲書八丁裏)。單なる兵部尙書であるならば次のグループに屬するのであらうが、やはり前官の待遇を受けたのであらう。尙「同平章事」なる漢字は確に此處にはないが、西藏文の方には前例に見る如き同平章事に當る *bkah chen po la fogs pa* が明かに記されて居る。

⑯ 羅氏 *ʔe* とのみ見るが氏の紹介せる繆氏拓本寫眞版

により *yei* なる事が推定される。(羅氏前掲書一七〇頁)。

①⑦ 拓本は /*shi ein* の如くにも見える。

①⑧ *se hem ge hu* は檢校であらう。但し漢文の方にはいづれの場所にも此の漢字は見當らない。

①⑨ *se* は「右」の古音 *se* と多少異なるが、當時の西北方言では此のやうな音であつたのかも知れぬ。「左」ではない。

②⑩ 羅氏 *kin* と読み漢字には「金」を當てて居るが繆氏拓本によつても *bin* 及び銀字は明かである(羅氏前掲書一七〇頁)。

②⑪ 全く磨滅して不明であるが西蔵字よりして「於陵」なる事誤ない。

②⑫ 茲の西蔵字 *se* は古形であらう。

②⑬ 羅氏 *kin* と読み漢字は「金」とするが(羅氏前掲書一七一頁)、*lin* の例よりして斯く定める(註②⑩参照)。

②⑭ *kwag phog* の如くに見えるが漢字音寫とすれば理解出來ない。暫く *kwai log* とする。

②⑮ *ken ke hu* 註①⑧の例と同じく檢校であらう。但し漢字「尙書」に當る西蔵字は見えない。

②⑯ 碑面磨滅せる爲判讀する事が出來ない。内藤博士は「金紫光祿」と讀むが西蔵字 *bin* は明かに「銀」である。*shen* の字亦若干明瞭を缺くが判底「紫」の音に

は當らない。銀青と讀むのを妥當とする。而して註②の如く *kwai log* なる字も些か疑はしい。故に銀青光祿は假に定めた文字とする。

②⑰ 内藤博士「左僕射」に讀まれて居る(内藤博士前掲書三四二頁)。今繆氏拓本を檢して羅氏と同様「右僕射」に讀む事にする。但し羅氏は西蔵字は故意に避けたのかブランクとして居る(羅氏前掲書一七一頁)。西蔵字 *ta* と「右」の關係は註①⑨に述べた。

②⑱ *ho* は *hu* の如くにも見える。

②⑲ 「光祿」の字全く讀めないが西蔵字より推定して確實である。

③⑰ 内藤博士「□□郎兵部郎中」を茲に入れて居られるが(内藤博士前掲書三四二頁)、今西蔵字の判讀によつてかく改める。内藤博士は舊唐書吐蕃傳の「兵部郎中兼御史中丞劉師老」とあるのによられたのであらうが新唐書吐蕃傳には「右司郎中劉師老」とある。右司は尙書右司なる事は勿論である。

[N表註]

① *bod chen po* なる熟語は西蔵史料には普通見出す事が出來ない。恐らくラウファアの云へる如く「大唐」に對抗して用ひられたる一時的の言葉であらう(Laifer, Bird Deviation among the Tibetans, T'oung Pao vol. XV, 1914, p. 74)

② 普通 *bion (po)* は「大臣」と譯する事が多いが、

かかる狭い意味にのみ解釋するのは正當でない。blon (po) は「官吏」——此の場合には嚴密な意味に於ての當時の吐蕃政府に屬する高級官吏——を云ふのである。邦文としての便宜上當譯文に於ては「大臣」「官吏」「役人」「臣」等の言葉在所々時に應じて用ひた。

③ 「大蕃」の二字全く不明であるが西藏文よりして誤ない。内藤博士も此の二字を補つて居られる(内藤博士前掲書三四〇頁)。

④ 此の行の名は恐らく當時の贊普に仕へて居た鉢挈連 dba^h ched-po の名であらう。俗人の名としては適當でないからである。yon は寺本師、yod とするが(寺本婉雅「唐蕃會盟碑文」大谷學報第十卷第三號一〇一頁)、拓本殘缺より考へると yon を妥當とする。固有名詞とすれば yon を可とする。此の者は當時の吐蕃宮廷に於て最も重要な人物の一人であつた。

⑤ ⑥ ch 系は此の碑文の例に従へば ho chog と書すべきを chos の添後詞 r^h ching のよの影響で chog となつたのであらう。ho chog は ngo chog の別形と考へられる。l. 15. l. 20. に出て来る ho chog も之と同様であらう。

⑥ khi のみ見えるが綺 k^h 字よりして khri とする。⑦ ⑧ 字には i^h の母音符號が共にない。字の下方は缺けて不明であるがリ符號は存在するに違ひない。心 sham であるからである。

⑧ rie の如くにも見えるが r^hie とする。「兒」音 r^hie の故にである。尙スタイノ文書 Stein Collection に shai khri suu r^hie と出て来るのは此の尙綺心兒と一致する (Thomas, F. W., Tibetan Documents concerning Chinese Turkestan, II, J. RAS, 1928, p. 72)。

⑨ 唐代支那史料には西藏官吏の名に「論」又は「尙」を恰も姓の如く用ひたものか非常に多い。「論」は之以下に屢々對比される如く明かに blon の音譯であり、「尙」は l. 9 以下に出づる如く shai の音譯である。blon 及び shai の語氣については本 N 表註②、W 表註②で説明する如くである。

⑩ 此の行は殆ど讀む事が出来ないのであるが、漢字の名號が次行のそれと同じ故に假に補つたのである。

⑪ rgyal は l. 2 の例により漢字「結」より推定したものである。

⑫ btsan btsan tsan づつれなるかは決定し難い。贊はいづれの字にも當て用ひられるからである。

⑬ bsher である事は l. 13 の例より決定する。

⑭ 新舊唐書吐蕃傳に大曆十四年頃より現れてくる尙結贊は之によつて shai rgyal btsan (又は btsan) と譯元せられる。

⑮ lha に対して食 tsu を當てて居るのは l. 14 の lho に對して土 tsu を當て、l. 19 の lha に對して他 tsu を當てて居ると同様注意すべきである。ラウフ

アーは前二者をそれぞれ *Ira*, *Ito* と誤讀) (Laufer, *Bird Deviation*, p. 73, 75)。¹⁷ ヴリオオのまゝ肯定して居るが (Pelliot, *Quelques transcriptions chinoises de noms tibétains*, T'oung Pao, vol. XVI, 1915, p. 4, 7)。¹⁸ *la* 音は現在のラサ音より少しく一音の強い舌尖中部不帶音摩擦音であつたのであらう。羅氏は當時譯音者が支那に此の音なき故にを以て代用せしめたものであらうと見て居る (羅氏前掲書一八一頁)。

- ¹⁶ 羅振玉は「熟」とするが西蔵字と對校して明かに誤である事はラウフアーの指摘せる如くである (Laufer, *Bird Deviation*, p. 73)。舊唐書吐蕃傳下の寶曆元年三月の條に、

遣使尙綺立熱來朝、且請和好、とあるのは恐らく同一人であらう。

- ¹⁷ ラウフアーによればバツシメルは *kuñ* とみたとき云ふが當らぬ。ラウフアー (Laufer, *Ibid.* p. 74) ヴリオ (Pelliot, *Ibid.* p. 5, 6) 羅常培 (羅氏前掲書一七四頁) 共に *kuñ* とするが、内藤博士の拓本によれば明かに *koi* である。ワツテルも *koñ* とロマンイして居る (Waddell, *Historical Fillets*, JFAS, 1911, p. 427)。

- ¹⁸ 内藤博士「類」とするが西蔵語は *regal* であるから「類」を正とする。ラウフアー、ペリオ、羅氏共に「類」とする。

- ¹⁹ 以上に名を掲げたる *bion* よりは若干位階が低く直接此の盟約に關して盟境に登つた意味で *bion phat* と稱したのであらう。但し漢文の登境にあたる西蔵語はここには見當らない。

- ²⁰ チム *achinas* はダスによれば「サムエ大寺院の近くの一村の名」であり、「種族名」name of tribal family である (Chandra Das, *Tibetan-English Dictionary*, p. 434)。地名よりして部族名になつたものであらう。チンデンツェン *khri sron lde bstan* と結婚したのにチムの王女即ちチムサ *nachins bzah* があり (Das, *TFD*, p. 434)。今之が L. 15 の例と共に *shan* と稱して居るのを見ると當時贊普の外戚系統として吐蕃宮廷にかなりの勢力があつたものと思はれる。ワツテルもチムの位置についてはダスと同様の事を云ひ、

此の地がチンデンツェンの夏牙の地であると云ふ (Waddell, *Ibid.* p. 431)。

- ²¹ ペリオは寫字に **niap* なる音があつたのではなくかと疑つて居る (Pelliot, *Ibid.* p. 7)。

- ²² 貞元三年の僞盟に活動する吐蕃の貴相論頗熟は之により *bion regal bsher* と還元される。

- ²³ *cog ro* は東部西蔵 *tsan dkar* 地方の地名である (Das, *TFD*, p. 385, Waddell, *Historical Fillets*, JFAS, 1911, p. 432)。

- ²⁴ *lho* と「土」との關係については註⑩を参照せられ

たい。

- (25) 内藤博士は此の字を皆「玼」とするが「紕」を正とする。玉偏であれば前行に琛字があるが全く似て居ない。羅氏も亦「紕」をとつて居る（羅氏前掲書一七三頁）。以下同じである。

- (26) 'sram phyi' は普通ダスによれば「便所」であるか (Das, TED, p. 769)。⁷ 此の場合には適用出来なく甚だ難解な語である。sram は一般的には「毛織の布」「毛布」の如きものを云ひ、⁸ phyi は phis とすれば「布片」「端片」を意味し複合語 compound として用ひられる事が多い語である。故に 'sram phyi pa' は「衣服を扱ふ者」として賛普付の「用度掛」とでも考へ得るであらうか。暫く「調度官」なる譯を當てて置く。

- (27) ラウファー (Lauter, Ibid. p. 75)。⁹ 羅氏前掲書一七三頁) 共に snag と読み「悉語」の對音としたが、ワッテル既に stag と読み (Waddell, Ibid. p. 427)。¹⁰ ヘリオも stag なる事を注意して居る (Pelliot, Ibid. p. 15)。¹¹

- (28) 内藤博士匣字に読み(内藤博士前掲書三四一頁)ラウファーは市字として eig の對音とする (Lauter, Ibid. p. 75)。¹² ヘリオは巾字に改め tsab の對音とする (Pelliot, Ibid. p. 8)。¹³ 羅氏は繆氏拓本によりヘリオと同説である(羅氏前掲書一七三頁)。¹⁴之に従ふべきであらう。

- (29) ラウファーは minan pon を min dpon とし、d は前のシラブルが neutral nasal の故に n に變り得るとし、minan pon は minah dpon の corrupt した形又は直接的な音譯と見るのであるが (Lauter, Ibid p. 75) 或はさうかも知れぬ。但し rulers and lords の意に解するよりは支配長官即ち「行政最高長官」の意にとるべきではなからうか。ラウファーは次の khab so を hai と読み、諸侯等の墳墓を守る役人として此の稱號を興味深く眺めて居るが khab so の方を正しとすれば「宮殿を守る者」となり、minan pon khab so は「賛普の宮廷を守護する者」いはいは近衛大將の如きものと考へられる。

- (30) 榑字はラウファーは「猛」と読み ba¹⁵ の對音としたが (Lauter, Ibid. p. 78)。¹⁶ 内藤博士「榑」と読み、¹⁷ 寺本師やはり榑と決定したが西藏字は kham¹⁸ と讀んで居る (内藤博士前掲書三四一頁、寺本師前掲書五五〇頁)。¹⁹ 羅氏も繆氏拓本により又「榑」と認めたが、khab so chog と讀むのには従ひ難い (羅氏前掲書一七三頁)。²⁰ 蓋し漢字「榑戸」の音を無視する事になるからである。今繆氏拓本を精査し、khab so ho chog とする。

- (31) ラウファー「勃」と読み、ヘリオは「劫」と讀んで居る (Lauter, Ibid. p. 75, Pelliot, Ibid. p. 10)。²¹ ラウファーは bio と見てその下に勃字を當てたのである

が、ペリオはかく見れば³²⁾に當る漢字が全く見當らなくなる爲に劫字と考へ、而して其の音を *kəp と見做し *kəp-la で gi-ba を表して居るものと定めて居る。今内藤博士拓本、繆氏拓本を對校すると寧ろ渤或は榻の如く偏が存在する如く見えるのであるが、暫くペリオの考へに従つておきたい。

³²⁾ hbal は東部西藏の don 族の一名稱であると云ふ (Waddell, Ibid. 1911, p. 432)。

³³⁾ 新唐書吐蕃傳下憲宗元和二年の條に「吐蕃使論矩立藏來朝」とあり、恐らく同一人であらうか。但し此の事は舊唐書吐蕃傳には見えなう。

³⁴⁾ ラウフアーは gyes とするが (Laufer, Ibid. p. 75) 名字に當るからワッデル、羅振玉、羅常培の如く gyes に取るべきである (Waddell, Ibid. p. 428, 羅氏前掲書一七三頁)。但し名 giang は nyet を寫したものであらう。

³⁵⁾ ラウフアーの言ふ如く之は dpag bsam ljon bran (Das 校訂 Calcutta 版 一五一頁) を除くは西藏文獻には見えなう官名で (Laufer, Ibid. p. 77) 吐蕃獨特のものである。

³⁶⁾ 羅氏は c'en (b)ka と讀むが(羅氏前掲書一七三頁)従ひ難い。na が添後詞 rje hjug である事は明かである。基本詞 miirje は全く讀み難い。暫く私意を以て bran とするが地名又は部族名であらう。普通名

詞とすれば「召使」「下僕」の意であるが茲では之を取らなう。bkahi phrin blon が給事中に當り bran ka が勃閣伽に當るのであらう。闌字は甚だ判讀し難いが繆氏拓本によりかく定める。

³⁷⁾ 新唐書吐蕃傳下に劉元鼎以下の使者が吐蕃に至つた事を記して

唐使者始至、給事中論悉答熱來議盟、

とあるが同じ時の給事中である點から考へて同一人と見做してよいと思ふ。さうするとこの論悉答熱の「悉答」は stag を表して居る事になる。ラウフアーは 1. 18. の論悉諸昔の諸字を判讀し得なかつた時 (Laufer, Ibid. p. 77) 對列せる西藏字 stag からして上述の新唐書の人名を利用し、stag 即ち悉答となし 1. 18 の缺字を悉答熱と推定して居る。悉答即ち stag とする事はラウフアーは方法に於ては之を誤り、結果に於ては偶然に成功した如く見える。之に對してペリオは悉諸が stag なる事を確めた後 stag に悉答を當てる事は不可能とし悉諸熱は stab bshar 又は sta bshar と解すべきだとして居る (Pelliot, Ibid. p. 14) 言語學的な方法から云へばペリオの考へは正確であるが上述の如き私見が成立するとすれば結局に於てラウフアーの比定を妥當とする。

(a) 尤も彼ラウフアーは 1. 17. の悉諸は讀んで居るのであるが諸字の音を rak (又は rac) とし、西藏名を snag

と誤讀した爲に、18の場合には、*tsa*に諸字を用ひる事が出来なくなつたのである。

- (38) *tsa pa* には「計算する者」を本義として「會計する者」「天文觀測する者」の兩義が生ずるか、ラウファアはロックヒルに従ひ (Rockhill, Tibet, JRAV, 1891, p. 220) *tsas pa che po* を現代西藏の會計長官 *tsa dpon* と同様なものとして居る (Laufer, Ibid., p. 18)。青木文教先生も之と同じ考へを直接語られた事がある。即ち現代の *tsa dpon* はは大藏大臣に當るのである。

- (39) ラウファアは *che po* と讀むが (Laufer, Ibid., p. 17) ベリオは「折通」が *cha po* であるから *ched po* を正とし、又 *cher po* なる語を考へるのも不可能でなしとし、ラウファアの *che po* 説を否定して居る (Tallent, Ibid., p. 14, 15)。ラウファアの説は添後詞を無視した點からして確に成立しない。ベリオは單に折通或は鉢埵通の埵通 *tsiŋ pu* よりして *ched po* なる語形を推定したのであるか之は當つて居る。スタイルン文書を見る時には *ched po* なる形は隨處に發見出来るからである。現代の西藏語には口語文語のうづれを問はず、かかる形は存在して居ないが、當時は存在して居たのであらう。

- (40) 「窩」に當る故、羅氏は *khool* とするが (羅氏前掲書一七三頁) 拓本の字形は全く異つて居る。

- (41) *tsa* と「他」との音讀の關係については註(15)を參照せられた。

- (42) 没唐は地名又は種族名であらう。新唐書吐蕃傳下に尙婢婢の事を記せる所に、

尙婢婢姓没盧名贊心牙、羊同國人、世爲吐蕃貴相、とあり、この尙□縷勃藏も多分羊同系の貴族ではないかと想像せられる。

- (43) ラウファア、ベリオ共に此の字を讀まないが羅氏はじめて之を「樓」と讀んだ。舊唐書吐蕃傳下永貞元年十月の條に、「贊普使論乞縷勃贊來貢」なる文あり、恐らく *blon lu bzai* と讀むのであらう。今彼此對照して縷を正字と定める。不明の一字は添頭詞 *nggophul* の *ng* に當るものであるが今決定し難い。

- (44) ラウファアは *shal law* 「法律」なる語に *ng* を付したものと解するが (Laufer, Ibid., p. 78, fn. 3) 即ち司法官、裁判官を意味するものであらう。

- (45) ラウファアは *blon rgyal han ji bzun* と讀み、羅氏は *blon rgyal 'gyen leg bzun* と判讀するが (Laufer, Ibid., p. 78, 羅氏前掲書一七四頁)、今種々考へて *blon rgyal skyen leg tan* と定める。

[W表註]

- (1) ワッデルが紹介して居る *Potala Pillar C* には *bsan rho* なる形がある。ワッデルはこの形を敬語として解して云ふ、これは現在敬語としては存在せず

「父」に對する稱呼として——動物の場合にも——用ひられるだけである。しかし古代に於ては原始社會狀態であつた時には王が彼自身を示す場合に恐らく此のやうな形も用ひたのであらう。「宮殿」の場合に *pho-brai* (父の在處) を用ひるのも同じ意味である。」と (Waddell, *Historical Edicts*, JRAS, 1910, p. 12, 69.)

② *abon shai* は *tsha shai* の敬語形で *abon* は「甥姪」、*shai* は普通母方の伯叔父即ち母の兄弟を指し、より廣い意味では母の兄弟の系統のものの族的稱呼に附加使用せられる語である。吐蕃に唐室から文成・金城の二公主が入興した事は下表にも記載されて居る如くであるが、此の碑文の場合にはかかる嚴格な意味に於ての伯叔父・甥姪の關係を示すものではない。若しさう解釋するならば穆宗皇帝の姉妹がチツクデツェンの母にならねばならなくなり、矛盾は忽ちに生ずるからである。新唐書吐蕃傳下大曆十四年の條に、

殿中少監崔衡往使、贊普獵曰、我與唐舅甥國、詔書乃用臣禮卑我、

とあり、又舊唐書吐蕃傳下建中四年の會盟の條に記さる盟文には、

與吐蕃贊普、代爲婚姻、固結隣好、安危同體、甥舅國將二百年、

とあつて唐蕃二國の關係を「舅甥國」又は「甥舅之國」と表現して居る。即ち此の碑文に *abon shai gnis* と

出て來るのは「舅甥の血族關係に會てあり、又その親愛を深く結んで居る二國或は其の王」の意に取るを妥當とする。又西藏語に於ては *abon shai gnis* と云ふ場合には何等血族的關係のなく、*spiritual brotherhood* を示す事があるから、之は即ち西藏の家族組織に於て自己と其の母の系統のものとの密接な關係を具體的事例として形容的に成立した熟語であらう。新唐書の例は明かに吐蕃の贊普が自ら云つた言葉であり、舊唐書の例も「舅甥」と書かないで「甥舅」と不用意に記して居るのは西藏文に記された語のそのまゝの翻譯したものなる事を思はしめる。西藏獨特の用語が唐蕃兩國の關係を表示し盟文にそのまま記載されて居るのは吐蕃の外交的攻勢を理解する一の例と認めてよいであらう。

③ *phun* の名詞形であらう。

④ *myi* は *ye* と同義である。添足詞 *ya baag* のある *myi* はスタインの文書にも多く見出される。

⑤ 直譯すれば *ro lo me* は「長石」であつて「石碑」の事を云ふが、現在の西藏文獻にて *ro lo me* とあれば大抵此の會盟碑を意味する事が多い。

⑥ 此の王名は拓本では不明であるが、次行に「文武孝德皇帝と甥舅二者」と出でたるにより、穆宗と同時代の贊普即ち下表の第一行に出づるチツクデツェンの *khri gtsug ide brtsan* なりとして誤なう。

- ⑦ yai thag par は yai dag par に解する。
 ⑧ numna 實は明瞭を缺いて居るが bsum に解する。
 ⑨ gyan 又は nian・bian とも見える。今 gyan (gyon の未來形) とする。
 ⑩ 'dai は教化せられて安寧秩序の保たれた状態を表現するのに用ひられる。今意譯して「安泰」とする。
 ⑪ 'don は「往く」の意であるが、今「彼此相方に行く」即ち「往來」の義にとる。
 ⑫ 將軍谷の位置は唐代の史料に見當らない。ペリオは龍威秘書により臨洮が西藏語で sri kun と云ひ、それが盛根と寫されて居るのにより將軍谷は此の臨洮を指したものでないかと云々 (Peliot, Ibid. p. 17)。
 ⑬ man cud は「低き方」、yan cud は「高き方」である。緩戎柵より低き方は即ち東方支那方面を云へるものであらう。
 ⑭ phu dud bya を青木師は「禮遇を以てし……すべし」とする(青木文教「西藏問題」二〇頁)。
 ⑮ dur ba は du ba と同義であらう。
 ⑯ gñi ma は ni ma と同義に解する。
 ⑰ skt. triratna の。
 ⑱ skyu 或は gyu とあらうか。いづれにしても同義に通ずる。
 ⑲ bñges は hñg pa の變化形であらうが今決定し難い。
 ⑳ ワンネルは此の行を yi ge……ja……phyag ruzod

du bñag go// とするが信用し難い (Waddell, Ibid. p. 492) 或は phyag shat du bñag の³ とも思はれるが決定し得ない。

〔E 表註〕

- ① 徳字には他處では皆「云」を當てて居る。chig は例外であらう。
 ② ラウフアーは rau を spu と讀み、ペリオは rau と讀んで居る。今ペリオに従つておく。ラウフアーは新唐書吐蕃傳上の初めに吐蕃の始祖として出現する鶻提勃悉野を之に當てて居る (Taufel Ibid. p. 75, fn. 4) 吐蕃の祖先については詳細は別稿で論述した。
 ③ zhi ba ならば「汚れたる」である。宗教的な汚れを意味する。「恩恵を國內の汚れの去らぬ人即ち未だ淨められざる人に付與する」の意であらうか。
 ④ hon と云ふのは印度・西藏の間に住し居る民族の綜合名である。特にネパール・ブータンを指す事もある。
 ⑤ drug については吐谷渾説と突厥説と二つあつたが、現在は突厥説が有力である。
 ⑥ チンツェン以前の名の王の名と思はれるが明瞭でないのは惜しい。
 ⑦ ntsho chen po は kuke nor を指したのであらう。
 ⑧ 次行に rten gsum とあるから此處に lo ni gu ともあるのであらう。もし之が眞實ならば貞觀十三年の

事となる。

⑨ 「一の王統のもとにする」とは唐蕃兩帝室が姻戚關係に入る事を言つて居るのであらう。

⑩ 支那史料に現れる「棄宗弄證」は即ち是である。西藏史料にソツエンガンボ *sroi btsan sgam po* として現れるのも同一人なる事確實であるが、何故に現在かかる名で呼ばれるのか、その緣由は詳にしない。當碑文の如き西藏側の重要史料に *khri sron btsan* と記されそれが支那史料に一致する事は西藏に關する支那史料の正確さを物語る一つの證據となるものであらう。

⑪ 支那史料の棄隸歸贊に完全に一致する。

⑫ *saṃ lan* は漢語「三郎」の音寫であらう。金城公主は入藏は中宗景龍三年の事なので此處にチデツクツェンと玄宗皇帝云々とあるのは誤とせねばならない。或は *saṃ lan* を以て玄宗登極以前の事を表して居るものであらうか。

⑬ *riul* 又は *riul* とも見えるが今 *riul* に見做しておく。

⑭ *thugs yi dam* は或は當時は *yi dam* の敬語形であつたかも知れないが、イェーシメケ等には *yi dam* の敬語形を *thugs dam* で出して居るので (*Tasche, Tibetan-English Dictionary, p. 509*)^{*} このやうに譯しておく。

⑮ *yab* は *pha* の敬語形であるが普通は肉體的なより

は寧ろ精神的な意味の「父」として用ひられて居る。例へば *rgyal po yab* と云へば「國家の父なる王」であり、*rgyal po yab yun* であれば「國の父母なる王及びその後」の意となる。又 *yab shas* と云へば全く精神的に親子の如く結ばれた親しさを示す。此の碑文の場合も恐らく「國父」の意味を表したものであらう。

⑯ *sha sia nas* は *shal sia nas* と解して「御前に」「眼前に」の意であるが、此の場合には「仰すらく」の意とする。

⑰ スタイン文書にはチツクデツェンの時代に勢力を振る大臣に *dbu ruog btsan sgam dkyal chen po* なるものあり、恐らく之を指したものであらう。既にチツクデツェンの前の贊普チデソツツェンの時にも斯の如くかなり勢力を持つて居た事が窺はれる (*Thomas, Tibetan Documents concerning Chinese Turkestan, II, JRAS, 1928, p. 80*)^{*}

⑱ *bkaḥ khon* は *khon* の敬語形であらうか。

⑲ この西藏文字 *ri* は古形である。

⑳ *bslas* は *sia* の動詞形であらうか。

㉑ *gsun* の *g* 及び *tshui* の *tshu* 拓本重なりて見えなうが試みに補つた。

㉒ 貞元の會盟の不成立を言つたものであらう。

㉓ *sku don* は *don* の敬語形である。*legs pa chen po* は

「大なる正しさ」「正義」の如き意に解すべきであらう。

(24) *abu rnuog hrtan* は直譯すれば「堅き壁(被れる)強者」となる。政治の最高實権を握れる大臣を稱したものであらう。或は *san dkyel chen po* を特に指して居るのであらうか。註(1)を参照せられたい。

(25) 京師即ち長安の西郊で此の年に盟をなした事は史料の示す所である。*tsang pa* (或は *tsang pa* か、明瞭でない)とは恐らく寺名であらうが今決定し難い。但し唐會要のみは會盟について場所を明示して居るが、碑文の地名と一致しない。

(長慶元年)十月、命宰相崔植等十四人、與吐蕃使論納解、盟於都城西王會寺。

(26) *tsang pa* が支那史料に現れる吐蕃の年號彝泰なる事は既に陳寅恪の説ける所である(陳寅恪「吐蕃彝泰贊普名號年代考」(《蒙古源流研究之一》)國立中央研究院歷史語言研究所集刊第二本三頁)。資治通鑑に此の時の王を彝泰贊普と記して居るのは此の年號によつたのであらう。従つて彝泰贊普がチツクデツェンを指したものである事は明かである。長慶元年が彝泰七年に當るから、彝泰元年は元和十年に當り、此の年又はその前年に贊普の踐祚があつた事が考へられる。新舊唐書吐蕃傳・資治通鑑・唐會要・皆元和十年又は十二年に前贊普が歿し可黎可足が後を繼いだやうに書いてあるが、之は唐朝への告喪の時期の所へ記した爲であつ

て、仔細に讀むと必ずしも陳氏の云ふ如く告喪の時期と遁去の時期とを混同しては居ない。

(27) これは此の場合 *tsang* と同義であらう。

(28) ラサが當時既に首府であつた事は支那史料に明記されて居る。

(29) ラウツァーは同盟は八二一年(長慶元年)に結ばれ、八二二年(同二年)に碑に刻まれたと記して居るが明かに誤である (Faulstich, *Ibid.* p. 68)。

(30) 舊唐書吐蕃傳下に劉元鼎の歸路を述べた後、時吐蕃遣使論悉諾息、隨元鼎來謝、命太僕少卿杜載、使以答之、

とあり、新唐書吐蕃傳下にはやはり劉元鼎歸路の後に慶(吐蕃)遣論悉諾息等入謝、天子命右衛大將軍令狐通、太僕少卿杜載答之、

とある故、恐らく此の碑の實地檢證には杜載・令狐通及び其の隨員が立會つたのであらう。碑文の此の前後には確に彼等の官姓名を記して居るのであるが、今模倣として判讀不可能なのは遺憾である。

(V 表漢文註)

(1) 此の漢文の部については從來内藤博士の判讀が最も權威あるものとせられたが、後姚徵元が穆氏蘇風堂の拓本によつて、より綿密なコッピイを發表した(「唐蕃會盟碑跋」燕京學報第十五期八九頁以下)。内藤博士と姚氏とはその基礎となつた拓本に多少の明確さの相

違があるらしく、従つて姚氏の據つた折本を我々が見る事を得ない。今日に於ては兩者の判讀を併記するより外ないであらう。既に仁井田博士が、法律文書としてこの碑文を利用された時このやうな方法を取つて居られるので、『唐宋法律文書の研究』八二(頁)、今それに倣つてテキストを作つた。

② 姚氏が此處の贊普名は正に西藏文の方から考へてもチツクデツェン khri tshug lde brtsan(姚氏は btsan と

見る)、漢字を見たのは正しい。しかし「文武孝德」と群體的に「黎德贊」を定めたのは直には従ひ難い。當時の語頭複合子音の寫し方には種々あるが、*khri* を黎で寫した例はない筈である。德字も *lde* を寫した例はない。強いて作れば此處は西藏記の如く「聖神贊普德足黎贊」とする方が音の上では妥當性がある。羅振玉は此處の空白の最後に都字を補つて居る(西陲石刻錄二十二丁)。

昭和二十三年度京都大學文學部

東洋史學關係講義題目 (前號より續く)

印度哲學史

講義 印度學(梵文講義と共通)

本田教授 二

研究 印度古代哲學史

佐保田講師 二

研究 婆伽梵歌第二章

本田教授 二

演習 學派時代の哲學思想

松尾助教 二

Siddhantaśūndarika
(梵文演習と共通)

本田教授 二

Śaṅkhyakārikā

松尾助教 二

梵語梵文學

講義 印度學

本田教授 二

研究 印度文化に於ける文學の地位

足利助教 二

印度イラン語に於ける
名詞の構成

伊藤講師 二

Pāṇinīyavadāna

善波講師 二

演習 *Pāṇinīyavadāna*

足利助教 二

Ālīkāśikā

足利助教 二

語學 *Sanskrit Grammar*

伊藤講師 二

Sanskrit Grammar

善波講師 二

(其の他の講義題目)

善波講師 二

語學 *アラビア語初歩*

藤本講師 二

西蔵語初歩

山口講師 二

蒙古語初歩

石濱講師 二